



写真-1 七坂八峠展望台から居組漁港を撮影（平成29年5月）

■ 七坂八峠展望台から望む居組漁港

写真-1 は、町道七坂八峠（ななさかやとうげ）線（国道178号の旧道）の七坂八峠展望台から居組（いくみ）漁港を撮ったもので、正面左側の山が不動山、右側が亀山です。町道のヘアピンカーブを走る赤い車の左後方に「魚見台公園」、前方に「龍神堂」があり、そこには龍神（八大龍王）が祀られています。この龍神は居組の漁師から守護神として信仰され、毎年11月10日に例祭が行われているとか。

『居組漁業史』によると、居組漁港は結川（むすぶかわ）河口にあって三方を山に囲まれ、前面には北北西に不動山を基点として大島・横島・小振（こおぶり）島・大振（おおぶり）島など、岩礁や小島が点在して一連の防波堤を形成し、不動山と亀山の間は約40m、面積は約4,700m²で、地元では綱掛泊地と呼ばれている天然の良港です。

江戸時代には北前船の避難港として大いに利用されていて、文明4（1472）年当時から「綱懸津」と呼ばれていたそうです。

写真-2 は昭和9（1934）年3月に写真-1とは逆の方向から撮った居組小学校職員の記念写真で、右手が不動山、背後の遠景は残雪の七坂です。不動山と亀山の松の木に結ばれた数条のロープに、船首を沖の方に向けた発動機船が何列にもなって繋がれています。



写真-2 綱掛泊地における発動機船係留状況（昭和9年3月）
（『居組漁業史』から引用・加工）

鎌倉時代の但馬国の土地台帳である『但馬国大田文』の大庭庄（おおばのしょう）に見える伊含浦（いくみうら）、また『但馬国にしかた日記』に出てくる「つなかけいくミ」とは、この港を指していると見られています。



図-1 居組漁港付近の地図

■ 秀吉、播磨・但馬を平定後、因幡に進攻する（第一次鳥取城攻め）

天正 8（1580）年 1 月、羽柴秀吉は兵糧攻めにより別所長治らが籠る三木城を落とし、3 月下旬には別所氏を助けていた三木通秋が籠る英賀城（姫路市）を攻撃、さらには毛利氏とよしみを通じていた宇野政頼の居城・長水山（ちょうすいさん）城（穴栗市）を 5 月 10 日に落城させ、播磨を平定します。

そして秀吉は、因幡進攻にあたって背後を衝かれないために、弟の羽柴秀長に但馬攻略を命じます。

この戦いは、天正 5（1577）年 11 月の秀吉による第一次但馬征伐に続く第二次但馬征伐と呼ばれています。

秀長は、宮部継潤（みやべけいじゅん）らとともに天正 8（1580）年 4 月から 5 月上旬にかけて竹田城を手始めに朝来（あさこ）・養父（やぶ）両郡の諸城を攻め落とし、さらに出石・気多（けた）の反信長勢力を攻略し但馬を平定しました。

但馬平定を終えた秀吉は、因幡攻めにかかります。先手を命じられた秀長は、天正 8（1580）年 6 月初めに 8 千人余の軍勢で出石を出発、蒲生峠（がもうとうげ）



図-2 鳥取城攻めに関する地図

を越えて因幡国に入り、百谷（ももだに：現鳥取市）を経て鹿野（しかの）街道をまっしぐらに鹿野城（気高郡鹿野町：鳥取城から西へ約 15km）へと向かいます。ここには毛利輝元が因幡国内の重要拠点城から徴した人質が取り籠められていて、その解放が目的でした。鹿野城に着いた 6 月 9 日、この城を蜂須賀勢 2 千人を加えた 1 万人余が取り囲み、500 挺の鉄砲の筒先を揃えて城に撃ち込み、1 日で開城させました。

時を同じくして 2 万 5 千人余の軍勢で鳥取城を取り囲んでいた秀吉は、人質の中にいた山名豊国の娘を城中の豊国に見せ、娘の命と引き替えに降伏を迫ります。豊国は、毛利の来援がすぐには期待できないことから、鳥取城周辺の邑美（おうみ）郡および高草郡の領地安堵の条件を聞き入れ、7 月に開城しました。秀吉は因幡の在番を秀長に命じ、姫路に引き上げました。

■ 鳥取城兵糧攻め（第二次鳥取城攻め）のために買い集めた米を網懸津（居組港）に運ぶ

その後、秀吉に在番を命じられた秀長も、因幡の支配を宮部継潤に任せて出石に帰ってしまいます。これにより支配が緩んだせいか、鳥取城開城に反対だった豊国の家臣、中村春統（はるつぐ）・森下道誉（どうよ）らはやがて豊国に反旗を翻し、天正 8（1580）年 9 月 21 日、豊国を鳥取城から追い出し、毛利元就（もとなり）の次男・吉川元春（きしかわもと）に援助を求めます。元春は、毛利の家臣で若桜（わかさ）鬼ヶ城城将の牛尾元貞に城番を命じます。

この情報は逐一姫路の秀吉のもとに報告され、折り返し秀吉から、この秋に因幡平野で収穫される米は 1 石たりとも残さず買い上げよ、との命令が届きます。この命を受けて、そろばんに明るいところを見込まれた杉原七郎左衛門と副田（そえだ）甚兵衛は、金銀は惜しみなく使えとの命令どおりに、並の値段の倍ほどの高値で新穀を買いあさりました。そして、岩井・法美（ほうみ）（以上岩美郡）、八東・八上（以上八東郡）から買い集めた米を浦住浦（鳥取県岩美町浦富か）へ運び、予めチャーターしていた 100 艘の船に積み込み、但馬井の浦まで回送して秀長方に引き渡しました。

井の浦とは、現在の居組漁港のことではないかといわれています。冬の日本海は季節風が吹き荒れて航行が難しいので、わずかな晴れ間を利用して運び出さなければなりません。そのためには行先が近場で、しかも他国であることが望ましく、網懸津（つなかけつ）はこの条件によくかかっています。

買い集めた米は 4 千石以上あり、うち 300 石は降ろすところがなく、米を積んだままの船を不動山と亀山の間に渡した綱に繋いで冬を越したそうです。その数は、チャーターした船 100 艘に仮に 4 千石積んでいたとすると、1 艘当たり 40 石なので、300 石であれば 8 艘ということになります。



写真-3 居組漁港の網懸津

■ 4 ヶ月で鳥取城落城～鳥取城の渴え殺し

鳥取城の城番・牛尾元貞は、織田方の桐山城※¹を攻めた時に深手を負い、療養のため出雲に引き上げました。春統・道誉らは元貞に代わる城将に吉川氏一族の派遣を希望したため、元春は吉川経家（つないえ）を城将に充てることにします。経家は天正 9（1581）年 3 月、死を覚悟し自らの「首桶」を持参して鳥取城に入ったとか。

一方、第二次鳥取城攻めを決意した秀吉は、秀長に再度の先陣を命じます。秀長は、天正 9（1581）年 6 月 18 日 2,300 人余の軍勢を整えて出石を進発、三原高原（新温泉町）を経て蒲生峠を越え、法美郡国府（鳥取県岩美郡国府町）に入り、翌日、円護寺山に陣所を構えます。前野長康は三原高原で本隊から 900 人余を分けて浜手に向かい、諸寄から浜伝いに浦富、ついで千代川（せんだいがわ）河口右岸の浜坂に着き陣を敷きました。そこから 7 町（≒760m）ばかり隔てた覚寺（かくじ：現鳥取市覚寺）には先着在番の宮部継潤がいます。

6 月 23 日には蜂須賀正勝・荒木重堅ら秀吉軍の先鋒隊 3 千人余が姫路を出発し、戸倉峠から因幡国へ入り、北上して百谷に陣所を置きました。秀吉の本隊 1 万余は 6 月 25 日に姫路城を出発し、7 月 12 日鳥取城の北東 10 町（≒1.1km）にある高山（本陣山あるいは太閤ヶ平）に至り、ここに本陣を据えます。

谷を挟んで北西の向かい側の円護寺山城には、秀長が陣取っています。備前・宇喜多勢 8 千人も美作境から因幡国へ攻め入って来ました。

秀長は、敵の食糧は呂美・高草両郡から調達する分ではとても間に合わず、不足分は海上を運んでくるとみて、千代川河口を封鎖します。付近一帯の舟を駆り集めて河口に並べさせ、その上に用意した長さ 9 尺 (≒2.7m)、幅 1 尺 2 寸 (≒31cm) の松板 1,500 枚を敷いて舟橋を造らせ、毛利方の穀物輸送船を寄せ付けない態勢をつくりました。

これに対し、鳥取城に籠城する将兵は、因幡の国衆 1,000 人余、毛利からの加勢 400 人余、合わせて 1,400 人余でした。経家は武器・兵員にはさほど不足を感じませんでしたが、兵糧がわずか 2、3 ヶ月分しかないことに不安を覚え、元春に糧食の補給を懇請しますが、時すでに遅く千代川河口は封鎖されていました。まんまと秀吉の術中にはまってしまった城の運命は、もはや明らかでした。

毛利方の鳥取来援が期待できないことを知った経家は開城を決意し、経家の自刃と引き替えに残る将兵の命をすべて助けたいと申し入れます。



写真-4 鳥取城跡天球丸、全国唯一の巻石垣

しかし秀吉は、中村春統と森下道誉、丸山城に籠もる塩冶(えんや)周防守高濑^{※2}・奈佐日本之介(やまとのすけ)・

佐々木三郎左衛門の切腹を主張して譲りません。結局、経家は天正 9 (1581) 年 10 月 25 日自刃し、前記の 5 人は経家より一足早く、それぞれの持ち場で自刃、これで 4 ヶ月に及ぶ鳥取城攻めは終わりました。

※1 桐山城：鳥取県岩美郡岩美町浦富に存在した城で、浦富海岸の背後にそびえる標高 203m の木山に築城された。但馬から因幡にかけての海岸線に多く存在した海賊城の一つで、但馬・因幡の海上交通路を押さえる要衝だった。

※2 塩冶周防守高濑：新温泉土木事務所西の城山山頂にあった芦屋城の城主。秀吉軍の但馬攻めにより芦屋城を追われ、天正 9 年 (1581) に吉川経家率いる毛利勢と結び、鳥取城攻めを進める秀吉と対峙することになる。高濑は雁金山に城を築き、日本之介が守る丸山城とともに鳥取城の兵站線を担当したが、鳥取城の落城により丸山城で自刃した。

■ 九州に向かう長岡幽斎一行が日没のため居組港に舟泊まり

天正 15 (1587) 年、丹後田辺城主・長岡幽斎^{※3} (後、細川姓に復す) の『九州道の記』に、秀吉の軍に加わるために海路九州に向かう途中、日暮れになったことから居組港に入港した時の様子が以下のように記されています。

其の日 (4 月 24 日) の暮ほどに、但馬因幡のさかひ、居ぐみといふ所に舟どまりしける。

主従(しゅじゅう)と 旅にしあれば 里の名の 居ぐみにしたる かりの宿かな

漁村のこととて武将を泊めるような旅宿があるはずもなく、身分の高い者も低い者も一緒に雑魚寝したそうで、歌人としても超有名であった幽斎が、不自由な旅の一夜を詠んだのが上記の歌だそうです。

では上記に関連して秀吉の九州平定話を少し。天正 14 (1586) 年頃九州では薩摩の島津義久が勢力を伸ばしており、島津氏に圧迫された豊後の大友宗麟が大坂まで来て秀吉に助けを求めます。秀吉は、島津義久と大友宗麟に朝廷の権威を以て停戦を命じますが、九州制圧を目前にしていた島津氏はこれを無視、頭にきた秀吉は島津氏を討伐することに。天正 15 (1587) 年の年賀祝儀の席で秀吉自ら九州進攻を諸大名に伝え、以後、同年 1 月 25 日に宇喜多秀家、2 月 10 日には弟の秀長の出陣を促し、3 月 1 日には自らも出陣します。

九州での布陣は、肥後方面を秀吉自身が、日向方面を秀長が率い、合わせて 20 万を数える圧倒的な兵力と物量で進軍しました。その肥後方面陣立の四番隊には、幽斎の嫡男・長岡忠興(細川忠興)が組み込まれています。

同年 4 月 17 日の「高城(たかじょう)の戦い」および「根白坂(ねしろざか)の戦い」の勝利によって、九州平定戦の戦局はほぼ決まり、「平佐城(ひらさじょう)の戦い」が島津勢最後の抵抗となりました。4 月 21 日、ついに島津義久は、人質を差し出して秀長に和睦を申し入れます。

ということで、長岡幽斎様御一行が居組に 1 泊していた時には、九州平定戦はすでに終わっていたことになります。これは恐らく、嫡男・忠興を秀吉の九州進攻に間に合うよう先に行かせて、すでに隠居の身の幽斎はゆっくり行く算段だったと思われます。(意図は理解しかねますが)

※3 長岡幽斎：戦国時代から江戸時代初期にかけての武将。本能寺の変後、信長の死に殉じて剃髪して家督を嫡男の忠興（奥さんは明智光秀の娘・珠、後に洗礼を受けてガラシャと称す）に譲ったが、その後も豊臣秀吉、徳川家康に仕えて重用され、近世大名肥後細川家の礎をつくった。また、二条流の歌道伝承者三条西実枝から古今伝授を受け、近世歌学を大成させた当代一流の文化人でもあった。後、長岡氏は細川姓に復した。その後の幽斎は京都吉田で悠々自適な晩年を送ったといわれている。

■ モノローグ

第二次鳥取城攻めでは、1年10ヶ月（天正6年3月29日～天正8年1月17日）に及び三木城兵糧攻めの経験が生かされたようで、事前に米を買いあさり、兵糧の支援ルートを押さえ、さらには鳥取城周辺の領民2千人以上を鳥取城内に逃げ込ませることで食糧の消費を加速させて、わずか4ヶ月で落城させています。ただ、短期間とはいえ餓死者が続出、何とも凄惨な状況だったそうです。

開城後、秀吉は飢餓状態の兵士に食糧をふるまったそうですが、勢いよく食べた人が次々と亡くなったという記録が残っているとか。これは極度の飢餓状態から、急に過度の栄養摂取をしたことによっておこるショック死（リフィーディング症候群）であったと考えられています。断食後の食事にも気をつけないといけないということです。

ツクシ（土筆）

トクサ科トクサ属の多年生の草本類で、日本に生育するトクサ類では最も小柄である。ツクシは、スギナにくっついて出てくることから「付く子」、袴の部分で継いでいるように見えることから「継ぐ子」となった説が有力である。一般的には栄養茎をスギナ、孢子茎をツクシ（土筆、筆頭菜）と呼び分けていて、ツクシの方は春の山菜として食用もされる。ツクシの穂は、やがて緑色を帯びたほこりの様な孢子を排出すると枯れてしまう。



写真-5 居組集落内の空き地で見つけたツクシ

【参考資料】

- 1 『城跡と史料で語る 但馬の中世史』 宿南 保 平成14年5月
- 2 『居組漁業史』 居組漁業協同組合編 昭和53年6月
- 3 『石造物～塩冶周防守顕彰碑』 新温泉町 HP
https://www.town.shinonsen.hyogo.jp/page/index.php?mode=detail&page_id=f46f1b7d5f048af15661159425e2077d
- 4 『大田文、鳥取城、吉川経家、桐山城、塩冶高濑、豊臣秀吉、細川藤孝、スギナ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 5 『新温泉町の街道(1)古道「浜街道」を訪ねる』 新温泉町歴史文化遺産活用実行委員会 平成28年3月
- 6 『【九州征伐】天下統一目前！秀吉の九州攻め！島津義久・義弘 vs 豊臣秀吉！』 戦国バトルヒストリー 令和元年7月
<https://www.sengoku-battle-history.net/kyusyuheitei/>

※発行：令和5（2023）年6月 『ひょうご水百景』 No.175

改訂：令和8（2026）年7月 『ひょうご水百景』 No.175